講演シンポジウム

都市・空間・ブルース
その4 演歌はブルースか

Dis, qúas-tu fait, toi que voilá
De ta jeunesse?
Qúas-tu fait, ô toi que voilá
Plevraht sans cesse,

たしかに在るのは<今>だけれど，断えざる<今>が<明日>になる，というのはやっぱり嘘だから，青春の解は青春それ自体の内にあるのではない，ということになる。人には生き甲斐が必要だというのは全く嘘で，自分が自分を殺さないですむように存在証明を一 <反響性言語模倣症> にかかっているとも知らないでつねに探しまわっているのさ。<行動と夢との間の取り返しのつかない 離別という 意気阻喪させるような観念> というのは来るべき未来の詩人によってのりこえられなければならない，というのに。だから，オポチュニストには悲劇は起りえないし，オポチュニストが<ここは東京ウソの街>とか<どこで咲いてもいつか散る> なんて歌うとたまらなく猥褻にきこえるのだ。彼が<どう咲きゃいいのさこの私> と歌うとどうせ俺たちゃ赤くも白くも咲けねえ 所詮ブチブルよてなカッコイイ開き直りの文句とともに情念は全然鬱積しないでみんな流されてしまうのだ。だからそこには，身の確かさを感じられない歎きはあっても <復讐に対する渇望と予定した目的を貫徹しようという意欲> なんてのは在りはしないし，まして<鉄を鍛えつづける観念の炎>もありはしない。ビリー・ホリディや藤圭子の唄は他に対する憩い入れや自己を二重映しにするいやしさなどを拒否し，自己を他から峻厳に切り離すところにそのブルースがあるのであって，かだらこそ その妄想と顫音(トレモロ)は革命の起爆薬にさえなりうるものを持っているのだ。時間と空間を超越しかつ占有する個的実存が織りなす有機的関係にブルースは 生れるのであり革命はきっと，その存在の夥しい群を媒介にするのだろう。

その時
塗り込められた情念は
　怨念の炎を燃やしつづけ
胸を切り拓くセラフィムは
　鮮血の奔流に倒れおち
ルーナチックな抱擁は
　ひとりの女をではなく　ほんとうは
さびしさに沈んだ風景を
　抱くことができるのだ